

I. 事業計画書

1. 本年度は以下の研究を実施する（詳細を4. 資料に示す）

- (1) 色差評価のための色空間の開発
- (2) PCCS 改訂版に関する研究
- (3) 学齢別・教科別の色彩の扱い方に関する研究
- (4) 色彩を通じた地域景観形成ワークショップの実践的研究
- (5) 色彩感情に及ぼす色の提示モードに関する研究—表面色と発光色の比較—
- (6) 視覚現象デモンストレーション用図版の作成
- (7) 色彩に起因する事故事例収集

2. 本年度は以下の事業を実施する

(1) 産業界、教育界との協力

官公庁、教育界、産業界からの受託研究業務として、色彩デザイン、景観色彩計画、色彩調査、色彩の産業応用及び技術指導・コンサルティング、各種色彩講座の企業内講習会、講師派遣などを実施する。また、JIS 準拠標準色票の第9版の試作研究、各種色票類の試作、標準白色板の校正試験等測定試験を継続して実施する。

(2) 色彩資料の開発と頒布事業

改訂版クロマトーン707、色彩教育用教材、画像評価用カラーチャートなどの色彩資料の開発を予定している。また、色彩教育用スライド集 CD-ROM 版の追補版の出版を計画している。

(3) 講習会、色彩講座の開催

定期開催の色研セミナーとして、下記の専門講座を開催する。

色彩指導者養成講座（第27期、28期）	2回
色彩管理士認定講座（第4期）	1回
色彩心理、カラーデザイン関連講座	4回
景観色彩計画関連講座	2回
色彩工学・技術関連講座	5回

(4) 定期刊行物及び広報等の活動

機関誌「色彩研究」Vol.56 No.1、No.2の発行

広報誌「COLOR」No.151、No.152の発行

ホームページ <http://www.icri.jp/> 更新年4回程度を予定

(5) 学会及び論文発表

当研究所紀要のほか、日本色彩学会、照明学会、日本人間工学会、デザイン学会、日本建築学会、日本心理学会、日本プラント・ヒューマンファクター学会、人類動態学会などでの大会発表、論文投稿を積極的に進める。

3. 処務関係

本年度は以下の会合を予定している。

- (1) 評議員会 2回開催
- (2) 理事会 2回開催

4. 資料（研究項目概要）

(1) 研究項目 色差評価のための色空間の開発

主任研究員 小松原仁

研究着手年月日 平成18年4月1日

協力機関 CIE TC 1-55

CIEシステムの一つであるCIELABは、色表示及び色差表示のために、産業界で広く利用されている。一方、マンセル表色系は、JIS Z 8721に採用され、規格に準拠した標準色票が色表示のために用いられている。しかし、CIELABで表されたマンセル表色系の無彩色点とCIELABの色座標の原点である無彩色点との間に偏心があることが報告されている。この原因について、マンセル表色系の色知覚実験における照度の影響を取り上げ、色票を用いた色知覚実験を行っている。本年度も色知覚実験を継続し、この推定の妥当性について検討する。

(2) 研究項目 PCCS改訂版に関する研究

主任研究員 小林信治、佐々木哲雄、小松原仁

研究着手年月日 平成20年4月1日

協力機関 慶応大学 福岡教育大学

これまで、PCCSにおける色彩とトーンの分割について、100色相環色票を用いた視覚実験、及びPCCSに基づいた色票集の代表値を用いた色知覚空間における特性についての解析を行ってきた。これらの結果を基に、PCCSの色相及びトーン分割方法のモデルを作成し、このモデルによるPCCS改訂版の基準値を設定した。この基準値に基づいた色票の試作を行う。

(3) 研究項目 学齢別・教科別の色彩の扱い方に関する研究

主任研究員：赤木重文

研究着手年月 平成21年4月1日

協力機関 色彩教育研究会

昨年度は、「教科の枠組みを超えた色彩教育の活用法に関する研究」をテーマに、色彩を扱う教科について、その実態を把握するための基礎調査と、複数の教科で色彩を扱う必要性についての考察を行った。

本年度は、各教科の色彩の扱い方について、カリキュラム案の作成を前提にした、より具体的な検討を行う。

(4) 研究項目 色彩を通じた地域景観形成ワークショップの実践的研究

主任研究員：赤木重文

研究着手年月 平成 21 年 4 月 1 日

協力機関 江戸川区

色彩が景観評価に及ぼす影響には多大なものがある。そして、その景観の影響を最も多く受けるのは地域住民である。地域の良好な景観形成を進めるにあたっては、地域住民参加による検討は欠かせない。

本研究は、実態調査から景観計画策定までのプロセスを住民参加型で進める方法について、色彩景観を対象にしたワークショップによって体験的検討を行う事例研究である。

(5) 研究項目 色彩感情に及ぼす色の提示モードに関する研究－表面色と発光色との比較

主任研究員 名取和幸

研究着手年月日 平成 21 年 4 月 1 日

同じ色として知覚される色刺激を、色票のような物体表面色として提示した場合と、ディスプレイなど発光色として提示した時に、それぞれの色から受ける色彩感情に違いがみられるのかを検討する。当研究所では、1970 年代から 1990 年にかけて色票集を用いた色彩好悪調査を行い、日本では白が好まれやすい傾向を繰り返し確認してきた。ところが近年行ったインターネット調査では、以前よりも白への嗜好率の大幅な低下が確認されている。これが時代に伴う変化であるのか、色の提示方法に起因するものであるのかという疑問に端を発する研究課題である。また、現代社会においては日常的にディスプレイによるカラー画像が高頻度で用いられていることから、明らかにしておくべき課題といえるであろう。この問題を進めるに当たり、単色として提示するか配色か、あるいは画像までを想定するか、提示色・背景色の設定をどうするかなど、検討すべき要件は多い。まず、提示色は単独提示とし、色票とディスプレイに知覚的に同じ色に見えるように調整した上、通常の単色イメージ調査でも一般に使用されるよりも数多くの評定尺度を用いて、印象を評価させる方法を考えている。

(6) 研究項目 視覚現象デモンストレーション用図版の作成

主任研究員 江森敏夫

研究着手年月日 平成 21 年 4 月 1 日

研究目的 これまで対比・同化などの色彩に関する現象を中心に図版の作成を試みたが、今年度以降は色彩関係に限定せず、視覚のさまざまな現象についての図版の作成を進めていきたい。これには、古典的な幾何学的錯視現象（長さ、大きさ、傾き等）を含め、近年関心が集まっている新しい錯視現象についても、資料の収集と図版の作成を行っていきたい。図版には動画を用いることにより、より効果的になるものもあるので、

アニメーション効果を有効に利用するとともに、利用者がインターラクティブに操作できるようにして、現象を体感できるような工夫も行っていきたい。

(7) 研究項目 色彩に起因する事故事例収集

主任研究員 赤木啓子

研究着手年月日 平成 21 年 4 月 1 日

安全・安心に関する社会的な関心は高まりつつあるが、色彩にまつわる事故についての調査については行われていないのが現状である。色彩が関係する事故事例を収集することは、事故防止の観点からも非常に有用であると考えられる。そのため、本年度は、これまでにどのような事故が起こっているのかを収集することを目的とする。対象は、産業界のみならず、家庭内や高齢者、子どもの事故を取り上げ、経済産業省や製品評価技術基盤機構、共用品推進機構、国民生活センター等で情報公開されている事故事例をもとに、広く横断的にデータ収集を行うものとする。